

る場合があつたと考えるべきである。前述した通り、平安期の例でも同一地名に兩方が冠される例がある。

「遠里小野」については前掲拙著『歌枕』に一章を設けた（同書一五一頁以下）。位置は犬養孝博士『万葉の旅』に、

住吉区遠里小野町および堺市遠里小野町の地で、大和川開さくによつて南北に分けられた。兩地の間に今、遠里小野橋を架す。

とする。遠里小野の範囲は広い。その全てが「住吉郡」に入る。その北部は「墨江」の故地に接する形である。

前述した議論から類推すると、「すみのえ」を冠した詠作は、遠里小野のうち「墨江」に接した場所で詠まれた（一首の詠作として「墨江」を視野に収め得る場所ではなかった）ものと考えられる。「すみよしの」は、「遠里小野」のうち、南部の、おそらく「墨江」を視野に収め得ぬ場所で詠まれたのではないかと推定できる。

（平成七年五月一日受理）

ミヨシノ』とあるは平安朝以後の俗風によれるなり。『吉』を『エ』
とよむは、『ヒエ』に『日吉』とかくと同じ。『日吉』も後世『ヒヨシ』
とよめるは同じく訛れるなり』とありて明快なり。此の地域は本来、
住吉の津即今の住吉神社方面を中心とする一地方を指すに止まりた
らむも、いつしか其範圍広くなりて、遂に郡名ともなりしなり。

と、その論をはじめておられる。

しかし、前述したように、これは奥野健治氏の本来の議論とは背馳する
ものである。御意見では「すみよし」の地名が先にあり、そこにある入江
が「すみのえ」だ、ということである。議論のはじまりは、右の如く、『万
葉集』の「住吉」の語についての伝統的な訓釈からはじめておられる。

それはそれでよいが、「すみのえ」と「すみよし」が別のものであると
いうのが氏の説であるにもかゝらず、「住吉」の文字を全て「すみのえ」
と訓んだ上で、議論をすすめられたので、奥野氏の三九章の論旨をたどる
のに甚だ困惑するのである。

奥野説の眼目は「すみのえ」と「すみよし」が全く別のものであること、
及び、「すみよし」の語が先にあり、「すみのえ」がその派生である、とす
ることの二点にある、と考えられる。その説を尊重したいのである。平安
時代には「すみよし」と「すみのえ」が別の内容を持った別の語としてそ
れぞれ独立して通用しており、前者が郡名、後者が入江の意であるが、か、
る現象の発端が、『万葉集』には「すみのえ」の語のみが存在し、「住吉」

なる語が「すみのえ」とも詠みうるという理由だけで、「すみよし」の語
が『万葉集』から消しさられ（つまり、「住吉郡」が『万葉集』から消失し）
た。このような理解で、平安時代の用語例に説明を与えることは困難であり、
不自然である。

そんな風に考えるより、『万葉集』中の「住吉」（墨吉も同様）の全てを「す
みよし」と訓んで、「住吉郡」を『万葉集』中に復活する方が総合的な理
解の上で、自然であり、整合性を確保することが出来る。

このように處理して、細部において不都合は発見できないと思うが、念
のため、一例だけ記しておく。

卷七、一一五六

住吉之 とほざとをの 遠里小野の 眞榛もち 摺れる衣の 盛り過ぎゆく

卷一六、三七九一（長歌）には

墨江之 すみのえの 遠里小野の ま榛もち にはほし衣に

の二例がある。同じ地名「遠里小野」に、一方は「住吉之」を冠し、一方
は「墨江之」を冠する。それ故、この例をもつて、「住吉」を「すみのえ」
と訓むべき根據の中にかぞえておられる注釈家もあるようである。

しかし、そのように理解せねばならない、ということはない。今の場合も、
文字通りに「遠里小野」には「すみのえ」と「すみよしの」の兩方を冠す

恐らくそれに近かりし状態なりしは推察し得べし。」とも述べておられるが、軽く考える理由があるのか、その理由は筆者にはわからない。

郡界を軽く考えねばならぬほど、当時は蒙昧の時代とは思われない。郡名は律令政府の行政地名である。そして、こゝは攝津国である。

郡の決定以前の地名について、奥野氏は次のように述べておられる。

猶、強て云はむか、住吉は隅の江にして（筆者注、『万葉集攝河泉志考』では奥野氏は「住吉」を全て「スミノエ」と訓んでおられる。）。

原難波の隅の江より出でて、隅と云ふ指示にその江が固着して隅江
 住吉となりしにあらざるか。繰返して云はば難波の隅に位する要
 港を斯く云へるならむ。即須磨が攝津の隅にして、大和国墨坂が大
 和の隅の坂より出でたる名称なるが如く、此住吉も当然かく解して
 不可ならざらむか。故に、住吉なる字面は墨吉にても清江にても差
 支へなき譯にして、總ては充字なれば字面に就いて立論するは末節
 の問題なりと知るべし。

この議論、甚だ重要である。即ち、従来の伝統的な考え方とは全く異なつた筋道をたどられたものである。「すみのえ」の語が先にあり、それを「住吉」と記したため、文字に惹かれて「すみよし」の語が発生したという考え方であつたのに、その筋道からはなれて、別の考え方の筋道をたどられたのである。

奥野説の骨子は郡名になつた「すみよし」の地名が先にあって、その「すみよし」の地の入江として「すみの江」の語が成り立つた、ということである。筆者は奥野説の骨格になつた考え方を支持したのである。平安時代の用語例を理解するのには、この方がはるかに自然である。長く「住吉」の語の訓読に拘泥して、その他に考える筋道を求めなかつたため、「すみのえ」と「すみよし」の兩語の關係が見失われてしまつたのである。伝統的な考え方では「すみよし」の語は『万葉集』から追放されてしまつたのである。『万葉集攝河泉志』の場合でさえ、三九章に「すみのえ」の項目を立てられるに際して（「すみよし」の項目は立てられなかつた）

「すみのえ（住吉・墨吉・清江・墨之江・須美乃延・須美乃江）」

と記されている。この項目の立てようでは「すみのえ」「すみよし」は同語として扱われたことになる。その理由について、

攝津。和名抄に「住吉須三與之」郡とある地。古事記・書記・風土記等

に古くより見えて名高し。神名帳、住吉郡「住吉坐神社四座並名神大、月次相嘗心嘗」鎮座す。今大阪市住吉区あり、又住吉、墨江二町立つ。

和名抄に須三與之と訓めるは後世の俗訓なること、目安補正に「日吉の社をひえの社とよみし歌、拾遺集に見ゆ。吉の字、共にえとよむを、中世より、住よし、日よしと転訛す」、講義に「古写本に『ス

をもちて冠用せりとは信じ難きも、軽く考ふれば恐らくそれに近かりし状態なりしは推察し得べし。

と言う。引用の地理志料の文章は、さきに第三章で試みた作業と同じことである。即ち、

住吉浅香浦（卷二、一二一）

住吉敷津浦（卷二、三〇七六）

などある「住吉」は、「住吉にある浅香浦」の意であつて、右の奥野氏も「住吉郡」と理解しておられる。郡名で判断されるなら、少なくとも右にあげられた地名に冠された「住吉」（及び「墨吉」）は「すみよしの」と訓読すべきものである。又、こゝにあげられた地名では、前述（第三章）のごとく、その大部分が平安時代の「すみよしの」を冠した地名と共通するものであることも注意すべきである。これらを「すみのえの」と置きかえることができないものであることを述べた。それは『万葉集』のこれらの「住吉」が「すみよし」と訓読すべき論據にもなる。

『万葉集』の「住吉」が旧來の伝統的な訓では一様に「すみのえ」と訓まれ、「すみよし」の語は全く『万葉集』から姿を消してしまった。しかしそれでは平安時代における「すみのえ」「すみよし」の兩語の用語例を理解するのに甚だ苦しい。その先蹤としては甚だ不自然である。『万葉集』

における先蹤はごく自然に平安時代の用語例を説明できるものでなければならぬと思う。

郡名の決定は大化の国郡設置の時である。その時に「住吉郡」という文字も定められたと考えてよい。「住吉」の文字が定められたのならば、それは文字だけでなく、その訓も定められたと考えられる。文字だけ決められ、訓が定められていない、ということはあり得ないことである。その時に「すみの江」郡であつたか、それは無理であろう。やはり、前述した『攝津国風土記』のように、神の言葉のとおり「すみよし郡」でなければならぬまい。又、『攝津国風土記』では「すみよし」が先であつて、「すみのえ」はその転訛である。又、『和名抄』の記載もそのまゝ認められる。郡名は国家の決定、律令国家の決定である。そういうものに、輕々しく俗用訓が入れかわつて行われる訳はないと思う。『和名抄』の「すみよし」が正式のものではない、とは言えまい。郡名の変更は正当の手續きによってなすべきことである。正当の手續きとは「勅」をもつて変更される必要がある。

『和名抄』の著者はそんなことを誰よりもよく知っている人物である。

郡名の決定は、勿論、それ以前から当該の地方で行われていた呼称がとりあげられたことと思われる。奥野健治氏の前掲の文章の中で、「郡名を冒す云々は嚴密なる郡の觀念をもちて冠用せりとは信じ難きも、」と言われるが、何故そう言わねばならないのかわからない。我々は「嚴密なる郡の觀念」で用いられた、と考えると不都合はない筈である。「軽く考ふれば

『和名抄』はたしかに天暦のころのものであり、著作年代は下る。しかし、『住吉』の文字も「すみよし」の訓も『和名抄』の著者が発明したものである。公的ではない。「住吉」も「すみよし」も郡名という公式のものである。それが、というの、それが律令国家の一環として設置されたものである。それが誤り伝えられる可能性はまずあり得ないことであろうし、勿論、『和名抄』

の著者が勝手に変更することはあり得ない。
郡名と言うことになる、『攝津国風土記』の文章を参考にせねばならない。

攝津の国の風土記に曰はく、住吉と稱ふ所以は、昔、息長足比賣の
すめみこと
天皇のみ世、住吉の大神現れ出でまして、天の下を巡り行でまし
て、住むべき国を覓ぎたまひき。時に、沼名棕の長岡の前
きまき
前は、今の神の宮の南の辺、是れ其の地なり。乃ち謂りたまひしく、「斯は実
に住むべき国なり」とのりたまひて、遂に讚め稱へて、「眞住み吉し、
すめみこと
住吉の国」と云りたまひて、仍ち神の社を定めたまひき。今の俗
略きて、直に須美乃叡と稱ふ。

とある。右の掲出の本文は岩波古典大系の『風土記』秋本吉郎氏の訓による。その「遂に讀め称へて」以下、原文を示すと左の様である。

遂讚稱之 云眞住吉々々国 一 仍定神社 一 今俗略之 直稱須美之穀

である。この訓読で注意すべき事は「今の俗、略きて、直に須美乃叡と稱ふ。」とある部分である。これを正直に訓むと「すみのえ」というのは「今俗」の称だ、ということである。「今俗」とは、現在の日常の言い方だ、との意味である。即ち、「すみのえ」とは、古く由緒正しい言い方ではない、という意味になる。即ち、郡名の起源としての神の言葉「眞住み吉し、住吉の国」というのも「スミノエ」と訓んではいけない、ということである。秋吉の言葉が「今俗」である筈はないし、あつてはならないことである。神の言葉が「眞住み吉し、住吉の国」とするが、これでは「今俗」の訓み方本訓では「眞住み吉し、住吉の国」とするが、これでは「今俗」の訓み方である。神の言葉としてはふさわしくない。「眞住み吉し、住吉の国」と訓まねばならない。秋本訓では、初の部分の「住吉と稱ふ所以は、」も「住吉の大神現れ出でまして」も「すみのえ」と訓んでいるが、これらも「す

みよし」と訓むべきものであることは勿論である。郡名が右のように理解される故に、奥野健治氏の次の文章は本稿の考察と直接にかゝわるので注意せねばならない。即ち『万葉集攝河泉志考』の「三九 すみのえ」の章（一四二頁—一四三頁）

蓋、歌に住吉之某と冠せる住吉なる地名は難波西南隅の漠然たる一地方名にして、凡地理志料に「按萬葉集有住吉淺香浦、住吉粉浜、住吉名兒浜、住吉遠里小野、住吉出見浜、墨吉淺沢小野、住吉敷津浦、住吉細江、墨江安良禮松原、墨江小集樂、此冒郡名称之、不必指言一郷也」と云へるが如し。但、郡名を冒す云云は嚴密なる郡の觀念

の神代四之卷（筑摩書房版本居宣長全集第九卷、二八一頁）の指摘が存在することは言うまでもない。

住吉を須美與志と唱るは、後世のことにて、那良のころまでは、須美能延とのみ云り、まづ此記には墨江とかき、書紀萬葉には、住吉と書ても須美乃延とよみ、又萬葉に墨之江清江須美乃延など有て、須美與志と云ることは一ツもなし、

と言う指摘である。この指摘はただの指摘ではなく、議論である。議論の目的は、所謂上代文学では、たゞ今問題にしている場合の「住吉」を「スミヨシ」と訓んではいけない、ということである。「住吉」の訓について『万葉集』の注釈書が提供する論據はその全てが「住吉」を「スミノエ」と訓むことが出来るということである。『古事記伝』の議論はその点がちがうのである。『古事記伝』の指摘乃至議論・主張は、少くとも、一般論としては仮名書きの例がない言葉は上代文学に於ては一切存在が許されないことになつてしまう。ここまで言うのなら筆者にはやや乱暴な氣がする。例えば、卷六・一〇四七には

…… 山見れば 山も見がほし 里見者 里裳住吉 ……

なる例がある。ここでは「住吉」の文字がはつきり「スミヨシ」と訓まれ

ている。「住吉を須美與志と唱るは、後世のことにて、那良のころまでは、須美能延とのみ云り、」という『古事記伝』の指摘は少々疑問になつてくる。勿論、これは攝津の住吉のことではない。偶然の一致だ、と言われるかもしれない。けれども、そう単純にはとれない。即ち、同卷一〇五九にも

…… 山高み 河の瀬清み 住吉迹 人は云へども ……
有杲石 住吉里乃 荒楽苦惜哭

という例もある。偶然で例にはならぬ、とは言えまい。『古事記伝』の場合も、『万葉集』の注釈家の議論も徹頭徹尾「住吉」という文字の訓読の議論を出でない。例にしない訳にはゆかない。それは「住吉」を「すみよし」と訓んではいけない、という議論ではなかった。「すみのえ」と訓むことができる、という主張であつた。しかるに、「住吉」を「すみよし」と訓んだ例が、一例ではなく二例たしかに存するのである。「すみよし」と訓んではいけない、ということはあり得ないと考える。それは『古事記伝』の仮名書きの例「一ツもなし」という指摘乃至議論があるにしても、である。

しかも、その『古事記伝』の指摘にしても、それは『和名抄』の攝津国住吉「須三與之」郡とあることを考えに入れなかった。たしかに『和名抄』は天暦のころのものであり、時代は下る。しかし時代が下る、という理由で考えに入れなかったとすれば、失当と言わねばなるまい。

雑上・読人不知) に対して「住吉と海人は告ぐとも長居すな人忘れ草生ふといふなり」(古今集・雑上・忠岑)「すみよしの恋忘れ草種たえてなき世にあへる我ぞかなしき」(新古今集・恋五・元眞、元眞集) など「すみよしの忘れ草」の例も多い。なお、ついでに一言すれば、「すみよしとあまは告ぐとも」の歌のように「人が住みよし」の意を掛けることも多いが、これは「すみのえ」でなく「すみよし」でなければ成り立たない表現である。

「すみのえ」「すみよし」は、まことに数多く歌によまれている。前述のように両者は異なった点も確かにあるが、実際に和歌によまれる場合は、共通したよみ方になる方が実ははるかに多かったのである。両者に「明白な区別」がなされていたとまではいいにくいのである。

ここでは「すみのえ」「すみよし」に共通によりみあわせられる景物をあげられた。その共通の景物として「浪」「寄る」「松」「忘れ草」の三種である。こうなっている作品が量的に多い、だから「すみのえ」「すみよし」はそうはつきりした区別がないものだ、というのが片桐氏の主張である。歌枕には恒常的に詠み合わせられる景物があるのは事実である。吉野山と桜、龍田川と紅葉のごときものである。けれども、当面する問題の場合、三種のものが共通する、だから「すみのえ」「すみよし」の兩語が殆んど同じものだ、と言えるかということであるが、それは無理という

ものである。「住吉郡」の海岸は所謂白砂青松という的な風景が連なっている所である。「すみの江」はその部に所在する。もとより同じ海岸であるから、「松」「すみよしのえ」のどちらを詠んだ作にも出てくるのは「忘れ草」の場合も、同様の事情と考えられる。たしかに定的な景物があるのは事実であるが、片桐氏の如く考へが「吉野山」にも「嵐山」にも詠みあわせられるからとが「明白な区別」がない、というのと同じ論理である。それが共通に詠まれることが「実ははるかに多かった」と「すみよし」の兩語に「明白な区別」がなされているのである、という論理は筆者にはわからない。両語のは、既にたび／＼あげてきた多くの事例によって明

六、『万葉集』とのかかわり

『万葉集』の、特に「住吉」なる語の訓釈については先生の『万葉集注釈』の説明が長い間の万葉学の結果たものであり、現在では殆んど定論と言うべきものに、それは「すみのえ」と「すみよし」の兩語の関係をものとして通用することになった。たしかに遺漏のないが、この様に考える以外に筋道はないのか、と問う、なお、同趣旨の説をなされた『万葉集』の注釈家の背

遺稿

「すみのえ」と「すみよし」(2)

奥村恒哉

一、

二、筆者の見解の要旨

三、片桐氏の異見提示

四、片桐氏の論、その前半

承前

五、片桐氏の論、その後半

後半は「すみのえ」「すみよし」の兩語に共通に詠みこまれる景物をあげ、「すみのえ」「すみよし」の兩語に区別がないことを論じようとされる。

いわば、ここが片桐氏の本論であり、氏の主張が盛りこまれる部分である。前掲の文章にひきつゞき、片桐氏の文章を次に掲げる。

以下「すみのえ」「すみよし」と関連してよまれる景物を紹介しながら、その実状を一覧してみよう。

「住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひぢ人目避くらむ」(古今集・恋二・敏行・百人一首) に対して「すみよしの岸の白浪よるよるはあまのよそめに見るぞかなしき」(後撰集・恋一・読人不知) があり、いずれも「浪」「寄る」をよんでいることにおいて共通している。

次に「松」をよむこと、特に「待つ」と掛けてよむこともきわめて多いが、「久しくもなりにけるかなすみのえのまつは苦しきものにぞありける」(古今集・恋五・読人不知)「すみのえの松を秋風吹くからに声うちそふる沖つ白浪」(同・賀・躬恒) に対して「白浪のよるよる岸に立ち寄りてねもみじものを住吉の松」(後撰集・恋一・読人不知)「すみよしの松に立ち寄る白浪のかへる折にやねはなかるらむ」(同・恋二・忠岑) をはじめ「すみよしの松」もきわめて多い。

「すみのえ」「すみよし」は、このように「浪」「松」とともによまれることが多かったが、「忘れ草」もまた多くよまれる景物であった。『万葉集』で「暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るといふ恋忘貝」(巻七)「住吉すみのえに行くといふ道に昨日見し恋忘貝言ことにしありけり」(同)とよまれた「忘れ貝」が平安時代になると「忘れ草」に全くいれかわってしまったのである。「道知らば摘みにもゆかむすみのえの岸に生ふてふ恋忘れ草」(古今集・墨滅歌・貫之)「うちしのびいざすみのえの忘れ草忘れて人のまたや摘まぬと」(拾遺集・